

令和5年度 薬学部・大学院医学薬学府（薬学領域）「部局長と学生との懇談会」要旨 テーマ：

（学部）所属学部での学びに関する知識・経験を広げるための留学

（大学院学生）英語による成果発信力を身につけるには

実施日時：令和5年10月23日（月） 15時30分～16時30分 （1時間）

場 所：薬学部大会議室

参加学生数：学部生、大学院生 16名

参加教職員：森部研究院長、小椋学府長、高野評議員、上原教務委員長、佐藤薬学科長

樋坂学生生活委員長、中村特任助教（亥鼻地区留学支援担当）

（学務課）戸田課長、渡邊副課長（大学院）、古場副課長（学部）、

渡邊大学院係長、坂本大学院係主任、学務係長、学務係主任

所属学部での学びに関する知識・経験を広げるための留学

（学生の意見：●、教員の発言：△）

意見：（詳細は別紙）

留学の目的について

- 1年次生については、留学未経験の学生が多いため、アカデミックな留学よりも語学研修や国際交流を目的とした留学を希望する学生が多数という結果だった。ただ、専門分野へのより広い視野からの知識習得、多方面からの理解を通して知識を深める留学を希望する学生の意見も挙げられていたので、薬学独自のプログラム開発もお願いしたい。
 - 2年次生からは、専門分野での知識・経験を広げるための留学目的として多様な留学の目的が挙げられた。大きく【語学・文化体験】、【派遣先大学等の学生等との協働学習】、【社会体験】および【研究】の4つのカテゴリーに分かれていた。
 - 3年次生および4年次生は、自身の研究について研鑽を深める目的で、自分の研究分野に強い大学や研究機関等への留学を希望する意見が多く挙げられた。
- △卒業要件とされているので、教員としてはなるべく早めに留学を計画してほしいが、特に1年次生や2年次生では専門的なことに関してはわからない状況だと思うので、留学の目的が語学研修や文化体験等に偏ってしまうことも致し方ないことだと思う。
- △薬学独自のプログラムは、薬学の教員がアジアの大学と交流があるという理由から、アジア方面に偏っているが、他の地域への渡航も可能である。自身で積極的に動くことが必要であるが、全学のプログラムに参加する等も検討してほしい。

留学の時期や期間について

- 1年次生および2年次生では、数週間～1ヶ月程度の留学を希望する学生が多くいた。一方で、3年次および4年次からは数か月～1年程度の留学を希望する学生も一定数いた。
- △最終学年まで留学に行かないという選択をしている学生もいるかもしれないが、卒業要件とされているため、最終学年まで引き延ばさない方が賢明であるかと思う。

留学前/留学中/留学後に必要と考えるサポートについて

●全学募集の留学プログラムに参加してきた学生より、特に留学後のサポートが足りないと感じたという意見が一定数挙げられた。

△全学募集プログラムの状況が説明され、このたびの意見については、留学生課等にフィードバックし、今後の課題として検討してもらう旨、発言があった。

(参考) 留学に際して必要となるサポートについて、全学年共通で概ね以下のような点が挙げられた。

留学前	<ul style="list-style-type: none">・ガイダンス (プログラム内容、事前の準備や現地での生活上の注意点, 危機管理ガイド等)・留学手続きのサポート・事前学習の機会 (専門用語について, 現地で学ぶ内容)・金銭的援助・留学経験者 (先輩) の体験談等 など
留学中	<ul style="list-style-type: none">・トラブル発生時に相談できる体制 (受診時の通訳など)・海外の企業や病院での見学・研修の機会・現地の先生や学生と疑問を解消し合える機会 (カウンセリングなど)・帰国後も生かせる知識や経験を積みたい・金銭的支援 など
留学後	<ul style="list-style-type: none">・留学で学んだことを適切にフィードバックできる環境づくり、後輩のための体験記・留学先と連絡をつづけられるサポート・事後課題 (ワークショップなど) など

重視する点/ハードルとなる点

(参考) 留学に重視する点やハードルとなる点について、全学年共通で概ね以下のような点が挙げられた。

重視する点	<ul style="list-style-type: none">・派遣先大学・機関等 (講義内容の質や薬学の研究が進展しているか、など)・プログラム内容 (留学期間、学びたい専門分野との関連度など)・プログラムのレベル (自分のレベルと乖離しすぎていないか、など)・渡航先の環境 (英語圏、治安、衛生面など)・同じ分野を学ぶ現地学生や教員との交流や協働学習・社会体験の有無 (渡航先での薬剤師や新薬研究の価値を学ぶ、など) など
ハードルとなる点	<ul style="list-style-type: none">・語学力 (専門分野における単語など) 不足・文化の違い・金銭面・長期留学による日本での学習の遅れ・日本未承認薬など、認識の違い など

△卒業要件だから留学に行かなければいけないという考える人や、せっかくの機会なので、有意義な留学を行いたいと考える人もいると思う。是非、この機会をポジティブに考えて対応してもらいたい。

英語による成果発信力を身につけるには

(学生の意見：●、教員の発言：△)

意見：

英語による発表で気を付けたことについて

- 事前に色々な国の方のネイティブの発音や抑揚をつけて読んでくれるサイトや、YouTubeなどでアメリカ英語やイギリス英語以外の英語を聞き、イントネーションの違いを学ぶという意見が複数あった。
- 自分の伝えたいことをボディランゲージでもよいからとにかく伝える。堂々とした気持ちで、笑顔で目を見て話せば相手が受け入れてくれるという経験談があった。
- 翻訳ツールを使用しただけの英語だと違和感があるため、論文などをよく読んで他の外国人の言い回しを参考にしているという意見があった。
- 翻訳ツールを使用した時は、その文章を Grammarly で添削したのちに自分で添削するという意見があった。

△発表は準備しているから何とかなるものの、聞く耳を持たない人にどう対応するか、ハプニングが起きたときにどうするかなどは生でないと体験できないので、ぜひそういう体験をするために留学や勉強をしてほしい。

大学からの必要なサポートについて

- 英語での発表あるいは議論を練習する場、実践の場が足りていないという意見があった。講義の場合は希望者のみが受けられるようにすることで機会を増やす。研究室のセミナーでもよいが、英語で発表する機会を設けなさいという決まりがあるとよい。
- 卒業論文や修士論文の要旨は、現在は主に日本語だが、英語も併せて作成するようにすることで、英語力の向上が見込まれるのではという意見があった。
- 学会発表が何らかの審査（奨学金の免除など）のポイントになる場合、国際学会で発表するときは国内学会で発表する時よりも時間をかけているため、ポイントを増やしてほしいという意見があった。
- 金銭的な支援という意見が複数あった。特に修士課程の学生については、学振や全方位、卓越などのプログラムもないため、金銭的な支援があれば国際学会に参加するハードルが下がるのではという意見があった。

△お金をもらって海外に行くということの責任。自分が何を日本に持ち帰ることができるのかを、特に大学院生は感じてもらった方がよい。